島崎藤村「朝飯」小考

——旅と青春——

長　田　真　紀

I

「青春18きっぷ」。これは、原則としてＪＲ全線の普通列車・快速列車の普通車自由席と宮島航路に五日分乗れるというフリーきっぷである。毎年、春休み・夏休み・冬休みの三シーズンに発売される。ひとりで利用するのもよし、同一行程ならばひとり一日分ずつ複数名での利用もできる。青春18と謳っているが年齢制限はなく、金額もこども・おとな同額である。

そもそもこのきっぷは、昭和五十七年三月、当時の国鉄が「青春18のびのびきっぷ」として発売開始した。翌五十八年春、名称を現在の「青春18きっぷ」に変更。昭和六十二年四月、国鉄が分割民営化でＪＲに引き継がれた後も発売が続けられている。

今日、ＪＲ各社はさまざまな特典を付した期間限定や地域限定のフリーきっぷを企画・発売しているが、「青春18きっぷ」ほどに人口に膾炙し定着したものはない。鉄道マニアを越えて、一般の幅広い年齢層の利用者に浸透し愛されている。

これは格安さもさることながら、「青春18きっぷ」という魅力的なネーミングに拠るところが大きいのではないだろうか。当初は、“金はないが時間はある”青年層の旅行者増大を図るために企画されたわけだが、年々、中高年の利用者が際立ってふえている。いってみれば、青春をとうに過ぎた人々に、より支持されているのである。

travel（旅）という英語は、「苦労して旅をする」が原義であり、十四世紀に古フランス語の travaillier（骨を折って働く）から借入されたものである。また、語源的に深い関わりをもつ travail（骨折り、労苦、苦悩、苦痛）という英語は、「陣痛、生みの苦

しみを味わう」といった意味に使われていた。これは、十三世紀に後期ラテン語の tripalium（火あぶり刑の拷問具）から借入されたものである[1]。なお、travaillier は tripalium を経たものである。

旅をすることは、多くの労苦と困難をともなうものであり、時によっては命を落とす危険性も十分あった。それでもひとは旅にでた。日常世界を離れることによって、見えてくるものがたくさんあった。本来の自分を取り戻し新しい自己回復も果たせた。旅は青年期にすることに大きな意味がある。のたうちまわるような苦しみを味わいながらも、日々新しい自分を誕生させることができる時期だからである。しかしそれは往々にして、過ぎ去ってしまった後になって気づくというパラドックスがある。

Ⅱ

古今東西、多くの文学者たちは、旅に人生を重ね、とりわけ青年期の遍歴を描いた。

島崎藤村が、明治三十九年一月の雑誌「藝苑」に発表し、翌四十年一月短編小説集『緑葉集』に収めた「朝飯」は、青春と旅をあざやかにものした珠玉編である。ところが、研究史上ほとんど取り上げられることがなく、かねがね惜しいと感じてきた。

本稿では作品の梗概を追いながら、少しく考察を及ぼしてみたい。

五月のある日、長野の測候所の技手をしている「自分」は、耐え難いほどの旅愁に駆られ、しきりと往時を追憶する。

> 半生の間の歓(うれ)しいや哀(かな)しいが胸の中に浮んで来た。あの長い漂泊の苦痛(くるしみ)を考へると、よく自分のやうなものが斯うして今日(こんにち)まで生きながらへて来たと思はれる位。破船――といふより外に自分の生涯を譬へる言葉は見当らない。それがこの山の上の港へ漂ひ着いて、世離れた測候所の技手をして、雲の形を眺め暮す身にならうなどゝは、実に自分ながら思ひもよらない変遷(うつりかはり)なのである。

現在は壮年と思しき「自分」の過去の「破船」が、いったいどのような周航を辿ったのか、具体的に語られることはない。しかし、何かに挫折し絶望した人間が、長い

彷徨の後、漸く現在のところに到達しえた感慨がしみじみと語られている。

さて、そこへ旅窶れした書生体の男が訪ねてきた。自分は即座にその青年の用件を看破する。青年は越後から都にいる親戚を頼って行くのだが、途中で煩ったため路銀を使い果たし一文無し。足は脚気のために歩行もままならない。どうか助けてくれ、と嘆願するのであった。

『実は――まだ朝飯(あさはん)も食べませんやうな次第で。』

と拝むように言った青年の一言に、自分は心を搏たれる。

「朝飯」――作品の題名にもなっているこの言葉に、藤村は「朝飯(あさはん)」とあえてルビを振っている。青年が「朝飯(あさめし)」ではなく「朝飯(あさはん)」と話していることで、青年の生い立った家庭環境が決して下賤なものでなかったことをにおわせている。また、「学生生活もしたらしい男の手」といういかにも藤村らしい観察眼によって、教養もつんだひとかどの青年であることを示唆している。

そのような青年が、「日に焼けて、茶色になつて、汗すこし流れた其痛々(いたいたし)敷い額の上には、たしかに落魄(らくはく)といふ烙印(やきがね)が押しあてゝあつた」ほどにおちぶれ、助けをもとめねばならないところまできた。ここでもやはりその理由や背景が具体的に語られることはない。しかし、冷酷無残な非情の現実のなかで、若き夢は破られ、傷心をかかえ、生の不安におののきながら、旅にでるしかなかった青年の孤独や懊悩は、抑制のきいた表現ゆえにいっそう悲愴さを喚起する。

目の前に立っている青年の様子は、まさにかつての自分の姿そのものであった。飢えと疲労とで慄え、恥じを忘れて人の家の前に立った時、思わず涙が流れたことなどがまざまざと甦る。過去をたぐりよせ身につまされる思いにかられた自分は、思いのほか青年の心に寄り添うのだった。

そして十銭銀貨を一つ青年の前に置きながら、何かして働きながら旅を続けたらどうかと優しく忠告する。

『僕も君等の時代には、随分困つたことがある――そりやあもう、辛い目に出遇つたことがある。丁度君が今日(こんにち)の境遇を僕も通り越して来たものさ。さもなければ、君、誰が斯な忠告なぞをするものか。実際君の苦しい有様を見ると、僕は大に同情を寄せる。まあ僕は哭(な)きたいやうな気が起る。真実(ほんたう)に苦しんで見たもので

なければ、苦しんで居る人の心地は解らないからね。そこだ。もし君が僕の言ふことを聞く気があるなら、一つ労働いて通る量見になりたまへ。何か君は出来ることがあるだらう——まあ、歌を唄ふとか、御経を唱げるとか、または尺八を吹くとかサ。』

尺八なら少し捻くったことがあると恥かしそうに答えた青年に、すかさず自分は、

『それ見給へ、さういふ藝があるなら売るが可ぢやないか。売るべし。売るべし。無くてさへ売らうといふ今の世の中に、有つても隠して持つてるなんて、そんな君のやうな人があるものか。』

と言い、粗末なものでもいいから、まず尺八を一本手に入れて、それを吹きながら旅をしたまえと、十銭銀貨を青年に与えた。

『いゝかね。僕の言つたことを君は守らんければ不可よ。尺八を買はないうちに食つて了つては不可よ。』

『はい食べません、食べません——決して、食べません。』

そう堅く誓った青年は、元気よく家を出ていった。

青年に対する自分の忠告は、いわば処世術である。自分は、かつて、無情の嵐にあおられ、流浪しながらも、その荒波の一つひとつをのりこえてきた人間である。そして現在は測候所の技手となって暮らしている。つまり漂泊者から生活者への変貌である。自分にとっては、心が砕けるほどに悩み、燃えた青春時代——シュトルム・ウント・ドランク——も、旅と同じように過ぎていったのである。

ここで、突然ながら話がロシア文学に逸れることを許されたい。

十九世紀ロシアの作家ゴンチャロフは、大傑作『オブローモフ』(一八五九年刊行)において、「水晶のような魂」[2]をもつ主人公イリヤー・イリッチ・オブローモフを、無限のいつくしみをもって見事に現出させた。ドストエフスキーの『白痴』のムイシュキン公爵に優るとも劣らない純粋な人物である。

そのオブローモフのもとを友人で作家のペンキンが訪ね、多忙ぶりをひとしきり語ってそそくさと帰っていく。その後、次のような件がある。

『夜中に書くなんて、』とオブローモフは考えるのであった。『いったいいつ眠るんだろう？　それにしても、年に五千ルーブリも稼ぐんだからなあ！　それだっ

たらまあ飯も食えようというものだ！　だが何でもかんでも原稿の種にして、思想を取り換え、自分の魂を小銭に両替えし、頭と想像を売物にし、自分の本性を強制し、興奮し、やきもきと夢中になって、平静ということを知らないで、始終どこかへ急いでいるなんて……しかも、のべつ書き通すのだ、車の輪のように、機械みたいにのべつ書き通すのだ。明日も書き、明後日も書きで、祭日がこようが、夏になろうが、先生のべつ書き通し！　いったいいつ手を止めて休むのだろう？　不仕合せな男さ！』

（中略）彼は自分が長々と寝そべって、生まれたばかりの幼児のように暢気であり、あちこち駆け廻る必要がなく、何一つ売らないで済む……のを嬉しく思った[(3)]。

プラグマティズムやスノビズムとは対極にあるオブローモフは、生涯、「売る」ことは無縁の一生を送った。そして、生活者になることもなかった。

一方、「朝飯」の自分は、厳しい人生を生きていくには、己の中の何かを売らねばならないことを身をもって体得し、またそのことを、分別を弁えたおとなとして青年に語った。もはや過ぎ去った旅への、一種の愛惜とさびしさを漂わせながら。

さて、自分は、青年に金と助言のふたつを恵んでやったことに二倍の喜びと満足とを感じている。すると、外から戻った下女から、青年が家を出るやいなや一膳飯屋へ入っていったことを知らされる。青年の『まだ朝飯も食べません』の言葉を思い出しながら自分は笑う。そして、さぞや相手も自分の話を思い出して『説法は難有いが、朝飯の方が尚難有い』などと言いながら、その日の食糧にありついたことだろうと、想像するのであった。

最後に語られるのは、その人にとって、その時、切実なものとはいったい何か、という問題であろう。青年にとってたった今重要なのは、飢えた腹を満たすことである。今後どのように旅をつづけ、人生を生きていったらいいかは、後まわしである。自分の与えてくれた忠告がどんなにかけがえのない体験から生まれた貴重なものであっても、それに従うことで、これからの青年の旅や人生が無用な労苦をすることなくどれほど楽に快活なものになったとしても、時宜を得た切実なものでなければ、こころのなかに沁み込んでいくことはない。後になって、ああそうだったのかと思った

としても、しょせん自らの手で人生をつかんでいくほかはないのである。

自分は、青年が先に食ってしまったことを知っても、怒ることはない。これもまた青春のひとつの通過点であることを知っているからである。

※「朝飯」の本文引用は原則として『藤村全集』第二巻（昭和五十三年八月　筑摩書房）に拠った。ただし、仮名遣いはそのまま、漢字は現行のものに改めた。

注

(1)　『ジーニアス英和大辞典』（平成十三年四月　大修館書店）を参照した。

(2)　米川正夫訳『オブローモフ』（下）岩波文庫（昭和六十年十一月）

(3)　米川正夫訳『オブローモフ』（上）岩波文庫（昭和六十年十一月）